



蛸親爺

第3話 二つ並んだ蛸頭

雅^{がうん}雲すくね

車の音が塊となって響き続ける大通り。銀杏並木の枝に烏がとまって一つなく。乗合バスの停留所に蛸が立つ。

蛸は頭に黒いネクタイを巻き、こめかみから垂らせている。

「たーこたーこ。たーこたーこ。来ねえバスだな。行き先違いのバスばかりだ。日曜日の四時台は時刻表に十分間隔とありますが、三十分も来ませんな」

蛸の鼻先をトラックが車体を軋ませて去り、排気ガスが蛸の頭を滑る。

「おう。びっくりした。げほげほ。こんな所で待っていちや、こっちがくたばっちゃうわ」

青葉を吹かせるべき風が、街路樹の埃を払い、一枚の葉を蛸の頭に吹き落とす。

「桃見、観梅、桜狩。木もなんだな。上の方にちょぼちょぼだ。葉っぱも下の方はからさし枯れ木だな。あれも草山にでも生えたかっただろう」と蛸は見上げた。

烏が見下ろす歩道の端を、小川青年が包みを下げてきた。

「おじさん、こんにちは」と糊気のあるシャツ姿で挨拶をした。

「おう。こりゃ小川さん。お出ましを願う」

蛸は足を立てて挨拶のつもりである。

「今帰りかい」

「ええ、古本屋に行ってきたよ。おじさんも帰りですか」

「ああ、御覧の通りよ」と蛸は黒ネクタイをつまんで見せた。

「それにつけても来ねえバスだな」と伸び上って通りを窺った。

「ギョーザー」と餃子屋のワゴン車が、後ろの戸を上げた先に、丸提灯に

餃子と書いたのをぶら下げて通りの端に行く。

「こののは、なかなか来ませんよ」

「本当だよ。何が十分間隔だ。二、三本抜いてんじゃねえか。ここで待ち合わせているうちに、向こう側で二台過ぎていったがな。餃子でもつまんじやおうかな。おっ来たか。噂をすればっと。ああ、また別のバスだよ」

バスが停留所に客を認めて寄って来た。蛸は頭の上で腕を交差させ、大きな×印を作る。

「おおう、違う」と上下に揺すって示した。

バスは再び歩道から離れて行く。餃子屋を追い越して端の車線を走って行った。

「こうしないと止まっちゃもうからな」

「ギョーザー今できましたギョーザー」と餃子屋は、電気コンロに載ったフライパンを揺らしてバス停から離れて行った。

「しかし、あそこも建て直したんだな。おれが小児こどもの折は木造でな。今みたいにあたりにも家もなく、林にかこまれていたからな。あの辺を通る時はなんとしても日の沈まぬうちに、と駆け出したもんよ」

「あの辺に住んでいたんですか」

「いっときな。親戚に預けられていたからな。しかし砂埃がくるね。げほげほ。坊さんに乗っけてもらえばよかった。『乗って行きなよ』ってすめられたものの、よしといたわ」

「どこのお寺の方ですか」

「あの蛸薬師よ」

「ああ、知っています。御本尊が蛸に乗ってやって来た。との言い伝えがある」

「おれが聞き知ったのは、夜な夜な蛸が大根畑へやって来ては大根を抜いて行く。この辺もかつては大根が名産でな。それで考えた農人が大根の代わりに薬師像を埋めといたら、まんまと蛸がそれを引っこ抜いて持って行った。あくる朝見てみると、蛸は小判になっていたって話だ」

「それでお寺が建つんでしょうか」

「おれも難しいことはわからねえが、まあ、それが話のわかる坊さんでな。」

小太りで、七十らしいが意気盛んでよ。『今日はみなさんお忙しいでしょうから、お経は略式で行きましようかな』とか言うんだ。おれもよ、待つ間、坊さんと隣り合わせになったんだけどよ。お互いに蛸頭だつてんで、気が合っちゃって。飲むわ飲ませるわ。おれのは本当のところ頭じゃなくて腹なんだけどな。五臓六腑が入ってるのよ』と蛸は頭を叩く。バスは来ない。『待合室つたって、いまだきカフェテリアみたいになつてんのよ。白の丸テーブルを皆でかこんで、それぞれに七人ずつ坐つてな。ビールやつまみが出てくるんだ。まずは坊さん、金の腕時計見ながら、『前、ここはおんぼろで、汚い木の階段昇つたもんだよ。やっぱり人間の油で煙突だめになつちゃうんだろうね』と大笑い。廊下でだつて、ほかの家の者が沈んで歩いてる傍らで、『夏は暑くてさあ。今頃が一番いいよ』つて笑いながら渡つていたからな。お経にしたつて、『なんまいだー、なんまいだー、なんまいだあ、あーあーあー、えーつと』つて問だけ延ばして経の本をどんだんめくつて行くのよ』

「決つた形の略式というのがあるのかと思ひましたよ」

「ただすつ飛ばすだけだ。『活字は左利きの敵であるからね』と経本で胸先を煽いでいたし。式が済んだら、またぞろ蛸頭並べて鮎とビールよ。家に戻つたからさ。座蒲団の上でくつろいじやつて。『皆、集まりで鮎とか生臭い物食つてるよ。僕は医者に海苔巻きにしときなさいよ。甘海老食つちやいけないよつて止められているんだけどね。食つても大丈夫だったよ』と大机に並んだ鮎桶から甘海老つまんで言うのよ。『僕はビールでうがいをするからね。ヨーロツパじゃ水代わりだよ。なんでかつつと、向こうは水がまるやかじゃないんだ。日本みたく資源がない国は水くらいうまくないとね。何か取り柄がないと、できそこないのタイ米みたいなんだから国土が。アッハッハ』つて小指立てて見せて、『こんな所に一億人も住んでんだからせせこましくなるんだよ。人間が。ガハハ』大方の者は帰つてんのに、まだ飲んでんだよ。『じゃあ最後、お茶代わりにビールもらおうかな』と他人に注がせておいて、『出されちゃつたものはしようがないな』と泡を啜つて、『泡食つちやつた。アッハッハ。おや、まだビールが半分ほど残っていますな。気の抜けないうちに飲まないよ』残つたビー

ルを手酌して帰ったな」

「気軽なお坊さんですね」

「うん、実際ね。あれで妻帯もしてねえんだ。かえって律儀に経を上げる住職に、『今度、下の息子が大学に入りまして』とか言われちゃしらけちまう」

「普通のお寺は世襲でしょうからね」

「今時、財産の処置にも手間取りそうだ」

「バスが来ましたよ」と通りを窺っていた青年が教えた。

「おあ、やあと来たか」

バスの扉が開く。

「うーい」と蛸は上がろうとしてよろめくも、八本の足で調子をとって立て直す。

「大丈夫ですか」青年は手を添えて支えようとする。

「今頃酔いが回ってきたわ。おお、空いてる。空いてる」

蛸は床を滑って後ろの席へ。青年も並んで腰掛けた。

「今日は、おじさんの親戚とかの式だったんですか」

「いや、魚久の親爺の弟のつれあいの婆さんだ。爺さんだっけ」

「そのあたりになると、親戚になるんでしょうか」

「まあ、ああいうのは、暇なら加わったらいいのよ。酒も肴も余るんだから」

「ところで、おじさんの御家族はどうしているんですか」

「いるよ。祝山通りの三丁目に住んでる。小さいながら一軒家だ。家内はもと玉子屋の娘でな。今は店は閉めちまったが、まあ、その辺の話はいいや。二十年も連れ添ってるから。娘は今年で高校を卒業したはずだ。いや、去年したんだっけな。色白で、鼻は小せえが、目は黒目がちだよ。髪は小児の時分から幾分栗色でさ。へへっ」

「おじさんは帰らないんですか」

「それがよ。帰ったんだよ。蛸になった日に一度帰って、叩き出されて。頃合いを見計らって、また行って、門の前で、さて、どうやって区別順序を立てて話したらいいのか。『あなたの旦那さんは先日、電車のなかで

蛸になりましたな。それが私です』とか言ってもなあ。仰天しちまうだけだ。ああ、めんどうだってんで、前と同じ調子で入ったわけよ。戸を引いて、『帰ったぞ』『あなたどこへ行ってたんです。ぎゃああ』よ。猫が尻尾を踏まれたような声出しやがって。出てきた娘には、箒で追い出される始末。それから通りかかってもいいねえ」

「そうだったんですか。でも時がたてば、わかってくれると思いますよ」
「へへっ。そうなりゃ、うれしいね」

バスが停留所で止まり、背の高い女の子が段を上がった。運転手の、「小児だよね」に、「おとなです」と答えた。

扉が閉まらぬ先に『ピーッ』と降車ブザーを鳴らせた者がいた。

「降りるんですか」と運転手がマイクで問うた。出口の脇の席から男が、「次です」と答えてバスは出た。

「なんだ、気の早い奴だ」

「近頃、大人もすぐに押しますね」

「へえ、せっかちな者が増えたのかな」と話すうちに、『かつら一丁目 理容アイカワ前』とアナウンスが流れた。

「あ、着きましたね。降りましょう」

「おおう」

蛸と青年はバス停に降りる。

横町に入れば、垣根に咲く金雀枝そにしだの黄色い匂いがしました。

「川置屋の黍団子を食べた。久玖利屋の草団子を食べた」という男の小児の、あたりに投げ散らかす様な声が、裏路地から伝わってくる。

「では、僕はこっちの方なので」

青年は半ば蛸に背を向けつつ、会釈をしながら歩き出す。

「お、そうかい。今度またゆっくり飯でも。あっそうだ、小川さん」と蛸は振り返りながら声を高くして青年を呼ぶ。

しかし、青年は疾く次の角を曲がったと見えて答えない。

「まあいいや、たーこたーこ。たーこたーこ」

薄曇の重なる空は低く、湿気を孕んだ風が、家々のうちならぶ路地から行人を絶った。

〈つづく〉